

平成24年3月

武田洋平 学位論文審査要旨

主 査 池 口 正 英
副主査 林 一 彦
同 村 脇 義 和

主論文

Expression of AID, P53, and Mlh1 proteins in endoscopically resected differentiated-type early gastric cancer

(内視鏡的切除をした分化型早期胃癌におけるAID、P53、Mlh1蛋白の発現)

(著者：武田洋平、八島一夫、林暁洋、佐々木修治、河口剛一郎、原田賢一、
村脇義和、井藤久雄)

平成24年 World Journal of Gastrointestinal Oncology 掲載予定

参考論文

1. Clinicopathological and patient characteristics of early gastric neoplasia endoscopically resected with loss of Mlh1 expression

(内視鏡的に切除されたMlh1陰性早期胃上皮性腫瘍の臨床病理学的特徴)

(著者：佐々木修治、八島一夫、林暁洋、武田洋平、八杉晶子、香田正晴、
河口剛一郎、原田賢一、井藤久雄、村脇義和)

平成22年 Oncology letters 2巻 217頁～222頁

審査結果の要旨

胃癌は*H. pylori*感染による慢性炎症、腸上皮化生を背景に発生するが、背景胃粘膜の変化と各種癌関連蛋白発現との関係は十分に検討されていない。一方、様々な癌種で遺伝子異常の原因の一つとして遺伝子編集酵素AIDの関与が検討されている。本研究では早期分化型胃癌症例におけるAID、P53、Mlh1蛋白発現と、患者・臨床病理学的背景の関係を検討した。その結果、AID蛋白発現異常は進行胃癌と異なり、P53蛋白発現異常と関連が無く、病変周囲粘膜で高度炎症細胞浸潤が高頻度であった。また、P53蛋白発現異常はMlh1発現異常と逆相関し、表面平坦型および陥凹型に高頻度であった。Mlh1蛋白発現異常は胃下部、表面隆起型、乳頭腺癌で高頻度であった。本研究の内容は胃の発癌予防および早期発見に有用であり、明らかに学術水準を高めたものと認める。